

沖縄歴史の散歩道

vol.19

◆墓を巡る⑤

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。

勝連グスク（うるま市）の三の郭の城壁付近からは14、15世紀頃の幼児の骨が1体、見つかっています。体を折り曲げた状態となっており、



木綿原遺跡 第5号箱式石棺墓（第9号人骨）（読谷村）
（世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム提供）

沖縄の歴史上、無数の墓が築かれてきました。そこに葬られた遺骨からその人物の様子やドラマをうかがい知ることが出来ます。貝塚時代（約2300年前）の木綿原遺跡（読谷村）から板状の岩で遺骨を囲った箱式石棺墓が複数見つかっています。そのなかで、ひたいにシャコ貝がのせられていた状態の人骨が確認されました。ひたひたには陥没した傷が確認されており、生前、鈍器のようなものでダメージを受けてきたと考えられています。どうやらシャコ貝に傷を癒す何らかの呪術的な力があると考え、負傷した箇所に置かれたようなのです。現在でもシャコ貝やスライジ貝を魔除けにする風習が沖縄には残っています。

通常とは異なる埋葬方法といえます。こうした事例は越来グスク（沖縄市）や浦添グスク（浦添市）でも確認されていますが、目立った墓標もなくグスク内の地中に葬った理由はわかりません。いずれにしても埋葬者は特別な存在であったことは間違いないでしょう。



勝連城跡出土 埋葬人骨（うるま市）
（うるま市教育委員会提供）

波照間島の大泊浜貝塚からは、約1000年前の母親と生後まもない赤ちゃんの墓も見つかっています。島の北側の砂丘、西表島を見渡せる場所に彼女らは埋められていました。女性は20代前半と推定され、体はうつぶせになり両手は腹部にあて、ひざは折り曲げられていました。そして赤ちゃんは母親のふとももに接する形で葬られていました。さらにシャコ貝や土器が副葬品として埋められ、墓のかたわらには大きなサンゴの塊が置かれていました。おそらく墓標でしょう。

上里 隆史 （うえざと・たかし）

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』（福音館書店、2020年）、『海の王国・琉球』（ポニー・インク、2018年）、『マンガ沖縄・琉球の歴史』（河出書房新社、2016年）、『尚氏と首里城』（吉川弘文館、2015年）など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「ブラタモリ」案内人などメディアでも活躍。



赤ちゃんは出産後まもなく亡くなり、親子はともに葬られたことがわかります。この時、残された父親はどうしていたのでしょうか？彼女らに供えられた副葬品は、父親の手にやるもので、土器は2人が生前使っていた生活道具だったのかもしれない。こうした悲しい歴史も墓からまた見えてくるのです。



浦添城跡出土 埋葬人骨（浦添市）
（浦添市教育委員会提供）